

二十四の瞳

Twenty-Four Eyes

観賞日 2019・11・11

【概要】

制作 1954年 松竹

上映時間 156分 (デジタルリマスター版)

原作 壺井栄

監督 木下恵介

音楽 木下忠司

撮影 楠田浩之

出演 高峰秀子 (大石先生)、笠智衆 (男先生)
月丘夢路 (マスノ)、田村高廣 (磯吉)
明石潮 (校長先生)



【あらすじ】

昭和3年4月、小豆島。島の小学生は4年生までは岬の分教場に、5年生になると本校の小学校に通う。分教場の新任教師は女学校を出た大石先生。先生は洋服を着て自転車で四里の道を通うモダンガール。先生が受け持つ生徒は1年生で総勢12人。ある日、先生は子供たちと遊んでいるときに足を負傷してしまう。心配した生徒たちは先生の自宅まで見舞いに行く。やがて、先生は本校に転勤となり12人の生徒とお別れになる。

5年後、世の中は不況になり日本は戦争体制に。生徒たちは6年生で本校に通うようになり、先生も結婚をする。卒業間近で各自、進路を考える時期になる。働く者、進学する者、……。学校内の窮屈な雰囲気嫌気がさした大石先生は学校を辞めてしまう。戦争への道をひた走る日本。戦地に赴く教え子たち。夫も戦争で亡くす大石先生。

昭和21年。長かった戦争も終わり先生は岬の分教場に復職する。先生の歓迎会。久々集まった教え子たち。見えぬ目で、昔撮った集合写真の説明をする磯吉。二十四の瞳が先生に贈ったプレゼントは……。

昭和3年から21年までの18年間を僻地の小学校を通じて地方の貧困と戦争の悲惨さを描いた大河小説の映画化。

【解説】

■ポイント

●木下恵介 (1912年～1998年)

- ・静岡県浜松市生まれ、松竹蒲田撮影所に入社
- ・1943年「花咲く港」で監督デビュー。
- ・黒澤明とは終生のライバルと目されたが、1969年に、木下、黒澤、市川崑、小林正樹の4人で「四騎の会」を結成
- ・代表作

「カルメン故郷に帰る」(1951年)、「日本の悲劇」(1953年)

「喜びも悲しみも幾年月」(1957年)、「檜山節考」(1958年)、「衝動殺人息子よ」(1979年)

- ・木下組のスタッフ

音楽：木下忠治 (実弟)、撮影：楠田浩之 (妹の夫)、照明：豊島良三

録音：大野久男、編集：杉原よ志

●受賞

- ・第28回キネマ旬報ベスト・テン：第1位 (同第3位に「七人の侍」)



■見どころ

- 全編を通じて流れる音楽がそれぞれの時代を反映する鏡となる
- 変わらぬ自然。変わりゆく時代と人々の生活